

影法師

豊島与志雄

青空文庫

うしろに山をひかえ前に広々とした平野をひかえてる、低いなだらかな丘の上に、小さな村がありました。村の東の端はしに、村一番の長ちようじゃ者の屋敷やしきがありまして、その堀へいの外の広場は、子供たちの遊び場所でした。

白く塗とった土堀どへい、左手はゆるやかな山すそで、いろんな灌かんぼく木や草がはえています。前には小さな川が流れていて、魚が泳いでいます。川の向こうと右手の方には、たんぼが続いています。子供たちはその広場でおもしろく遊ぶことが出来ました。

晴れた日の朝早く、長者の子供を交まじえて三四人の子供が、いつものように、そこで遊んでいました。東の地平線から出たばかりの太陽の光りが、皆の影を白い壁にくっきりとうつしていました。その影があまりはつきりしておもしろいので、皆は影うつしの遊びを始めました。

「ああ、いいことを考えた」と長者の子供がふいに叫びました。「待つといでよ、じきに来るから」

そして長者ちやうじやの子供はいきなり駆け出して、うちの中にはいつて行きました。お祖父さんおじいが、大きなまんまるい眼鏡めがねをかけて、縁側えんがわで本を読んでいた。

「お祖父さん、僕にあの……東の塀へいを下さいよ」と子供は言いました。

お祖父さんは、まんまるい眼鏡の下にびっくりした眼を開いて、子供を見ました。

「なに、塀をくれて……」

「ええ、下さいよ。おもしろいことがあるんです。こわしやしません。ただ遊ぶだけなんです。塀で遊ぶんです。ね、いいでしょう」

「塀で遊ぶって……おかしなことを言う子だね。こわしさえしなければよいけれど……」

「じゃあ下さいね。遊ぶだけなんですから」

そして子供はもうお祖父さんの側から駆け出して、部屋の中はいつて、大きな硯すずりば箱こを持ち出して、またもとの塀の外に駆けてきました。

「何をするの」

待つてた子供たちが集まってきました。

「今ね、この塀をお祖父さんからもらってきたんだ。だから、こわしさえしなけりや、何をしたって叱しかられやしないよ……これから皆の影法師かげぼうしを、この塀の上に写し取るんだよ」

「影法師を写し取る……うん、おもしろいな」

皆はわーっと声を立てておもしろがりしました。そしてすぐにそのしたくにかかりました。小川の水を硯にくみ取って、一生懸命に墨すみをすりました。早くしないと、太陽が昇ってしまいます。太陽が昇ってしまえば、影法師かげぼうしは小さくなってだめなんです。

「僕が考えたんだから、僕が先だよ」

そう言つて長者の子供は、白い塀へいの前につつ立ちました。その姿通りの影が、白塀しろべいの上にはつきりうつりました。それを他の子供たちが、墨すみをいっぱいふくました筆で写し取りました。

「影法師なんだから、すつかりまつ黒に塗らなけりやいけないよ」

そして皆は影法師の形をまつ黒に塗り始めました。硯すずりの水がなくなると、また小川の水を汲くんできて墨をすりました。

そのうちに、太陽はずんずん昇っていつて、塀にうつる影法師は小さな不格好なものになりましたので、長者の子供一人のだけで、他のは写し取れませんでした。

「また明日の朝にしよう」

二

毎日晴れた日が続きました。子供たちは朝早くから白堀の前に集まって、かわるがわる影法師を写し取りました。

そのことをおもしろがって、他の子供たちも集まって来ました。そして太陽が出たばかりの頃、日に二つか三つずつ影法師を写し取りましたが、日がたつにつれて、堀いっぱいたくさんになつてきました。高いのや低いのや、肥ふとつたのややせたのが、皆まつすぐを向いてずらりと並びました。墨でまつ黒に塗つた影法師かげぼうしですから、太陽がいくら高く昇つても、太陽が沈んで晩になつても、ちようど人がつつ立つてるように、そこに、白い堀へいの上うへに、つつ立つています。

それを見て、通りがかりの大人おとなたちは、「えらいことを始めたな」と言いながら、にこにこ笑っていました。長者のうちのお祖父じいさんも出て来て、大きなまんまるい眼鏡めがねの下に眼をまんまるくして、「ほほう」と感心したように眺め入りました。

「これが僕んですよ」

「これが僕んですよ」

子供たちはめいめいそう言って、自分の影法師の前に立ってみせました。背の高さから形まで、^{からだ}身体どおりの影法師でした。

さて皆の影法師が写し取られて、塀いっぱいに並びますと、これからどうしようかと、子供たちは考えました。写し取っただけではいつこうつまりません。

「影法師が塀からぬけ出して踊ってくれるといいんだがなあ」

そう皆は考えました。そしていつも塀の前に集まっては、何度もくり返して考えました。しかしそんなことが出来るわけはありません。

ところが、ある日、皆がやはりそこに集まって、同じことをこそそ話し合っていますと、いつのまにどこからやって来たか、髪みの長い見馴れない男が、そばにつっ立って笑っています。

「君たちはばかなことを考えてるね」

そしてやはり、塀の影法師を見て笑っています。

子供たちはそれがしやくにさわりました。髪みの長い見馴れない変な男ですけれど、それみもかまわずに、皆でつめよっていききました。

「何を言ってるんだい。何がばかなことなんだい。影法師かげぼうしを踊らせようとするのが、何

がばかなことなんだい。おもしろいことじゃないか」

見馴れない男は、さも愉快ゆかいそうに、はっはっ……と笑いました。そして言いました。

「なるほど、私が悪かった。それはおもしろいことに違いない。……それでは一つ私が教えてやろうか。その影法師を踊らせることを、教えてやろうか」

「え、おじさんはそんなことを知ってるの。教えて下さい。ね、教えて下さい」

「じゃあ教えてやろう。そのかわり、私の影も一つ、そこに写し取ってくれなくてはいけない。そして、明日の朝早くここに来れば、君たちの影法師は踊れるようになってるだろう」

子供たちは大変喜びました。そして堀へいの片隅かたすみの空あいてるところに、見馴れぬ男の影法師を写し取りました。もう太陽が高く昇ってしまいましたので、男の影法師は低くぴしゃんこになって、おかしな格好でした。

「だめだよ、日が高くなってるから……。おかしいな」

「いや、それで結構けつこうだ」

そして男は、自分の変な影法師を見て、はっはっは……。と笑いました。

「それでは、明日の朝早く皆でそろっておいでよ」

男はそう言いいすてて、どこかへ行つてしまいました。

三

子供たちはその晩、おちついて眠れませんでした。自分たちの墨絵すみえの影法師かげぼうしが、堀へいからぬけ出して踊りはねるといふんですから、待ちきれませんでした。翌朝は早くから眼をさまして、皆誘おとない合わせました。大人たちが何かたずねても、今にびっくりさしてやるという気持ちで、まじめくさつた顔をして黙おとなっていました。

やがて皆そろいましたので、胸をどきどきさせながら、長者の屋敷やしきの東の白堀しろべいのところへやつて行きました。

ところが、一目見ると、皆はあつと口の中で叫んだまま、おどろいて立ち止まりました。皆のおもしろい影法師がいつぱい立ち並んでいた白堀は、一面に何かでまつ黒に塗こられてしまつて、そのまつ黒な色がまたひどく濃こくて、いわば闇の鏡こみたいになつて居るのです。影法師どころか何一つ見えないで、ただ一面にまつ黒なだけです。

「はっはっはっは……」

高い笑い声がしたので振り向くと、昨日の男がそこに立って笑っています。

「私のあのおかしな影がね、一晩のうちに大きくなって、堀いっばいにひろがったのだ。とんだことになってしまった」

それを聞くと、子供たちは急に怒り出しました。その男がだまかしたのだ。嘘を言ってるんだ。影法師が一晩のうちに堀いっばいに大きくなるなんて、そんなことがあるものか。その男が堀をまつ黒に塗りつぶして、皆の影法師をなくしてしまったのだ。

「嘘つき、嘘つき。僕たちをだまかしたんだな」

そう言つて子供たちはつめよつていきました。

「はっはっはっ……」と男は平気でなお笑つています。

「人をばかにしてる。なぐつちまえ」

気の早い子供たちは、棒ぎれを捨てたり、石をつかんだり、げんこを握りしめたりして、男へ向かつていきました。男は笑いながら、あちこちへ身をかわしました。ひどくすばしい影のような男で、大勢おおぜいでいくら追っかけても、つかまえることが出来ませんでした。「君たちはばかだな」と男は広場の中を逃げ廻りながら言いました。「そら、まつ黒な堀の中で、影法師が踊つてるじゃないか」

そう言われてから皆は初めて気づきました。東から出た太陽の光を受けて、黒い鏡のように光っている塀の中に、皆の影法師が浮き出していました。白塀しろべいにうつつたのとちがつて、奥深いまっ暗な中にうつつてるものですから、そうはつきりはしていませんが、すかして見ると、ちようど生きた人間のように浮き出しています。それが、皆が動くにつれてあちこちへ動き廻つて、大勢おおぜいの本当の子供たちが踊つてるようなんです。

「おや、これはおもしろいや。ふしぎだなあ」

皆は黒塀くろべいの鏡に影法師をうつして、ふしぎそうにのぞきこみました。眼や口や鼻までそっくり見えて、向こうにも同じ生きた子供たちがいるようなんです。

「わかつたかね、はっはっは……」

皆が振り返つてみると、髪の毛の長い見馴れぬ男は、なお笑いながら立ち去つて行きました。引き止めるまも何もなく、まるで宙を飛ぶようにして、山の方へ見えなくなつてしまいました。子供たちはあつけにとられました。

そこへ、長者のうちのお祖父じいさんが出て来ました。子供たちは昨日からの話をしました。お祖父さんはびっくりしたように、まっ黒な塀へいを見ていましたが、しまいに言いました。

「それはきつと、大変えらい人にちがいない。お前達はよいことを教わつたものだ」

子供たちはさっぱりわけがわかりませんでした。けれど黒塀くろべいの鏡が出来たのはうれしいことでした。朝日のさしてゐる時ばかりでなく、午後になつても、月が出てれば夜分やぶんでも、黒塀の鏡は皆の姿をうつし出してくれました。それもただの影法師かげぼうしではなく、生きた人間と同じ姿なんです。

皆はいろんな姿をうつして、自分も踊り影の姿も踊らして、いつも大変愉快に元気に遊びました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

影法師

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>